平成3年度厚生省心身障害者研究
「小児慢性疾患のトータルケアーに関する研究」

川崎病における急性期断層心エコー図正常例の遠隔期成績

山田健一朗，小佐野　満，森川良行

要約：昨年度，我々は川崎病の急性期2カ月間に胸部レントゲン写真，心電図，断層心エコー図上異常を認めなかった955例の遠隔期成績について報告したが，今回，さらに追跡調査を行った。急性期に心血管障害を認めなかった症例に，その後，異常が出現する可能性はきわめて低く，急性期から2年間繰り返し行った諸検査が正常であった症例については，経過観察期間中に心血管障害を来たした例はなかった。このような症例については，発症後2年以降は定期検査に間隔をもたせてよいと思われる。

見出し語：川崎病，心合併症，遠隔期成績

【目的】川崎病既往児の中で，心血管系後遺症を持つ患児の長期管理については，多くの検討があり，主に循環器専門医が担当している。しかし，急性期から心血管障害を認めない患児については一般臨床医が管理しているのが現状である。したがって，急性期に冠動脈病変が出現しなかった症例の遠隔期予後を知ることは，実地診療の上に重要である。我々は，昨年度，急性期に胸部レントゲン写真，心電図，断層心エコー図上異常を認めなかった症例の遠隔期予後について報告したが，今回，さらに経過観察期間を延長し検討した。

【対象及び方法】対象は昨年度と同じ症例で1978年1月1日から1991年12月31日までの間，当院及び17の関連施設で経過観察できた川崎病症例のうち，発症後2カ月間胸部レントゲン写真，心電図，断層心エコー図で異常を認めず，その後の経過を6カ月以上観察し得た955例である。これらの症例の胸部レントゲン写真，心電図所見，断層心エコー図所見，予後について検討した。

【成績】955例中，男児が526例，女児は429例で男女比は1.2であった。発症年齢は1カ月から16歳で，51パーセントが2歳未満，82パーセントが4歳未満で発症した（図1）。発症年度別に見ると，1982年，及び1985年から1986年に発症した症例が多く，これらの成績は全国的な統計とほぼ一致している（図2）。経過観察期間は6カ月から

慶應義塾大学医学部小児科学教室
（Department of Pediatrics, School of Medicine, Keio University）

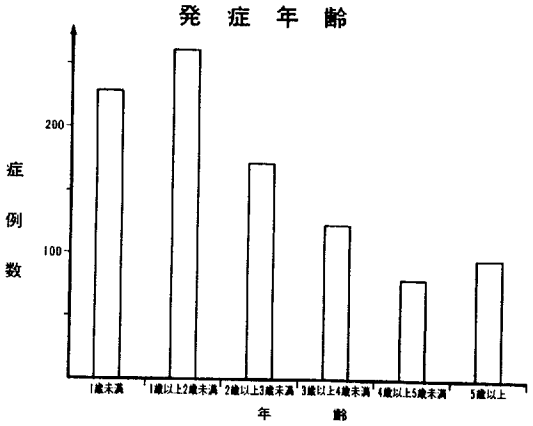

図 1.

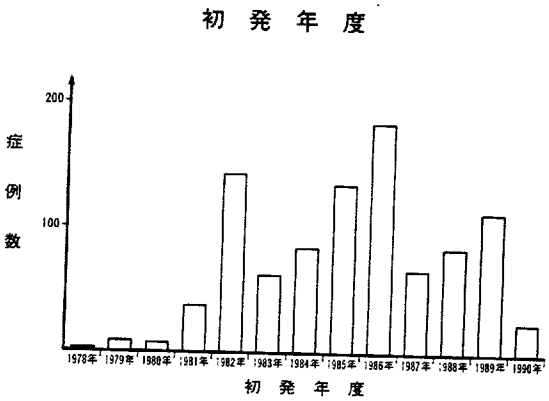

図 2.

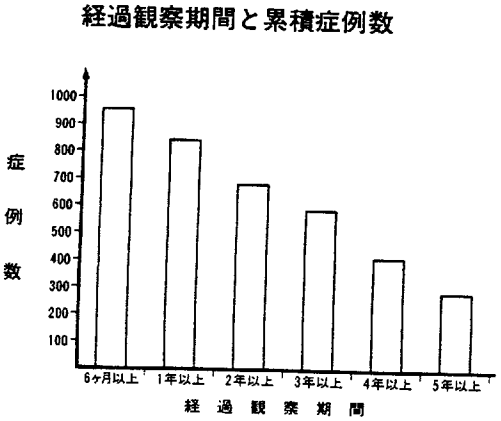

図 3.

表 1.

急性期以降に断層心エコー図で異常が出現した症例

症　例	1	2	3	4
発症年度	1981年	1981年	1983年	1985年
発症時年齢	1歳10ヶ月	2歳1ヶ月	3歳6ヶ月	2歳1ヶ月
経過観察期間	9年1ヶ月	3年11ヶ月	1年6ヶ月	4年8ヶ月
心エコー図所見	右冠動脈起始部軽度拡張	左冠動脈前下行枝軽度拡張	左冠動脈起始部軽度拡張	左冠動脈起始部軽度拡張
冠動脈病変発見時期(発症後)	2年1ヶ月	3ヶ月	5ヶ月	9ヶ月
冠動脈病変消失時期(発症後)	消失せず	1年10ヶ月	6ヶ月	2年11ヶ月
心電図所見	発症後2ヶ月時から，不完全右脚ブロック	正　常	正　常	正　常
胸部レントゲン所見	正　常	正　常	正　常	正　常

12年8カ月で，687例，72パーセントを2年以上，296例，31パーセントを5年以上観察した（図3）。昨年度，急性期に冠動脈病変を認めず，その後，軽度の冠動脈拡張が認められた4例を取り上げたが，そのうち1例，症例3は今回も経過を追うことができ，観察期間中に特に異常を認めなかった。軽度の冠動脈拡張を残した症例1，冠動脈病変が正常化した症例2及び4は今年度は経過観察できなかった（表1）。 この4例のうち最後に冠動脈病変が発見されたのは，ほぼ2年後で，その間繰り返し行った諸検査が正常であった症例については，経過観察中に冠動脈の異常を来たした例はなく，もちろん死亡例もない。

【考按】今回の対象も，昨年度報告したように，男女比，発症年齢，発症年度とも全国調査と，ほぼ同様の傾向を認めた。今年度は昨年度対象とした症例のうち約20パーセントを引続き経過観察することができたが，急性期2カ月間に異常を認めなかった症例に，その後，心筋梗塞などの重篤な心合併症を来たす可能性はきわめて低いものと思われ，急性期から2年間繰り返し行った検査で異常の認められない症例については定期検査に間

隔を持たせてもよいものと思われる。しかし，現在までのところ，最も長く経過をみた症例でも12年程度で，まだ成人に達した症例が少なく，川崎病に罹患した事が成人期にどの様な影響を与えるかは今後の課題で，現時点では急性期から心血管障害を認めない川崎病既往児についても，一定期間で経過観察を中止するのは時期尚早と思われる。今後は，このような症例の長期的な管理について，小児科医だけではなく内科医とも協力し検討していく必要があると考えている。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:昨年度,我々は川崎病の急性期2ヵ月間に胸部レントゲン写真,心電図,断層心エコー図上異常を認めなかった955例の遠隔期成績について報告したが,今回,さらに追跡調査を行った。急性期に心血管障害を認めなかった症例に,その後,異常が出現する可能性はきわめて低く,急性期から2年間繰り返し行った諸検査が正常であった症例については,経過観察期間中に心血管障害を来たした例はなかった。このような症例については,発症後2年以降は定期検査に間隔をもたせてよいと思われる。